

61046 61043	教育実習（短期） 高等学校教育実習 （事前・事後指導を含む）	3単位 通年	4	講義 実習	芳澤 拓也 城間 祥子
----------------	--------------------------------------	-----------	---	----------	----------------

■**テーマ** 観察・参加・実習という方法で学校現場における教育実践に関わることを通し、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する。

■**授業概要** 【題目】教育実習への自覚と期待

「教育実習」は、大学における事前指導、学校現場における教育実習、大学における事後指導の3部から構成され、これらすべての授業・実習に参加することによって単位が認定される。学校現場における教育実習は大学で習得した一般教養の知識、専門教科や教職科目に関する理論や技術を、実際の学校教育の場面で生徒との直接的なふれ合いの過程を通して、応用する貴重な機会である。経験豊かな指導教諭のもとで指導を受け、教職体験を積みながら、教員に必要とされる基礎的な知識や技能を修得し、教員となるための教育実践の基礎的能力と態度を培うことを目標とする。

なお、教育実習（短期）については、平成30年度以降入学生を対象としたものである。

■**到達目標**

- ①教育実習生として遵守すべき義務等について理解するとともに、その責任を自覚したうえで意欲的に教育実習に参加することができる。
- ②生徒との関わりを通して、その実態や課題を把握することができる。
- ③指導教員等の実施する授業を自分なりの視点を持って観察し、事実即して記録することができる。
- ④教育実習校の学校経営方針及び特色ある教育活動並びにそれらを実施するための組織体制について理解している。
- ⑤学級担任や教科担任等の補助的な役割を担うことができる。
- ⑥学習指導要領及び生徒の実態等を踏まえた適切な学習指導案を作成し、授業を実践することができる。
- ⑦学習指導に必要な基礎的技術（話法・板書・学習形態・授業展開・環境構成など）を実地に即して身につけるとともに、適切な場面で情報機器を活用することができる。
- ⑧学級担任の役割と職務内容を實地に即して理解している。
- ⑨教科指導以外の様々な活動の場面で適切に生徒と関わるすることができる。
- ⑩学校現場における教育実習を総括し、教員となるための基礎的能力と態度について意見を述べるすることができる。

■**授業計画・方法**

【事前指導】（5月上旬）

教育実習に先立ち行なわれる事前指導は、中学校や高等学校の教員及び教育センターの指導主事など指導的立場にある現職教員による特別講義と本学の教職課程の教員で以下の内容で講義を分担する。講義を通して教育現場に関する知識や実情を習得し、派遣実習校での実習が円滑で実り豊かなものとなるようにする。

- 1 教育実習の意義と目的、内容
- 2 高等学校の教育と教育実習生に望むこと
- 3 特別活動について
- 4 生徒指導・教育相談について
- 5 ホームルーム活動について
- 6 高等学校美術科・高等学校美術科の指導と展開（学習指導案の作り方）①
- 7 高等学校美術科・高等学校音楽科の指導と展開（学習指導案の作り方）②
- 8 高等学校の現状と課題への対応
- 9 卒業生と語る・具体的アドバイス
- 10 教育実習の心構えと注意すべき事項
- 11 中学校における「道徳の時間」の指導
- 12 学級経営について
- 13 研究授業の持ち方① 導入・展開・まとめ
- 14 研究授業の持ち方② 評価
- 15 事前指導のまとめ

【教育実習】

本県では毎年6月に指定された期間、県外はそれぞれの実習校の指定した日程で実施する。中学校の教育活動を実際に体験し、生徒への理解を深めるとともに、美術・音楽の教科指導、道徳教育の実践的指導能力を高める。また、学級活動や学校行事等の特別活動に参加し、学校における教職員の職務を理解して、中学校の教員として必須の基礎的能力や資質を育成することを目標とする。なお、具体的な教育実習期間は教育実習校との調整によって決定される。

【事後指導】

実習終了後の事後指導は、学生各自が教育実習から得た実習体験について、学生間で広く意見交換を行なう。加えて、実習体験記を『龍樋一教育実習体験記』に掲載し刊行する。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

実習校の評価、事前・事後指導における平常点や課題提出などを総合的に評価する。

■成績評価の方法

□方法 欠席、遅刻、各課題に関する提出物の未提出についてはきびしく評価する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（作品）等

□参考図書 『新編 教育実習の常識』教育実習を考える会 蒼丘書林 2000年